

# 酒蔵

## 近代新潟の酒造り

藍野 かおり

平成十七年の新潟県の清酒生産量は、兵庫県、京都府に次いで全国第三位です。中でも、純米酒や吟醸酒といった「特定名称酒」と呼ばれる清酒の生産量は全国の二五%を占め、第一位です。また、県内の酒造会社数も、九四軒で全国二位です。生産量だけではありません。新潟県における成人一人当たりの清酒消費量は「八・三リットル」で位です。新潟県は「酒造王国」と呼ぶにふさわしい県になりました。

すつきりとした味わいで全国に知られている新潟の清酒は、「淡麗辛口」が代名詞になっています。淡麗辛口の酒は高度経済成長期における欧米風の食生活や労働形態の変化などライフスタイルの変化にマッチし、昭和四十年代以降の地酒ブームを巻き起こした立役者でもありました。では、それ以前の新潟の酒はどのような造られ、人々に楽しまれていたのでしょうか。

今回の展覧会では現在の新潟市域を中心に明治時代から戦時中の酒造りについて紹介します。

### 酒造りの歩み

現在、新潟市域には一五の酒造会社があります。その多くは、明治時代半ばごろに創業しました。

江戸時代には、酒造は幕府の統制下にあり、酒造株を持つ者のみが酒造を許

されてきました。明治になり、近代的な租税制度が整備されると、免許税を支払えば誰でも酒造業に参画できる仕組みになりました。酒造には、その道具や原料など多大な資本が必要でしたが、酒造技術がそれほど発達していないころは、酒が腐って商品にできなくなることもあり、リスクの大きな産業でした。しかし、酒造業に参入する人々が増え、造石高が増えると、税収増加のためにも国は醸造試験所を開設し、腐造のない科学的な酒造りを研究し、それを全国の酒造場に普及させていきます。また、県下の酒造場への指導や酒造技能者の育成のために新潟県醸造試験場が昭和五年に設立されます。明治末期から昭和初期にかけては、よりよい品質の酒よりよい味の酒をつくるために、官民が力を合わせながら努力をしていた時代といえ

ました。新潟で造られた酒の多くは、地元で消費されました。しかし、新潟と酒を考えると北海道の存在は欠かせません。近世から北海道(蝦夷地)には、新潟酒も運ばれる品の一つでした。展覧会で紹介している明治四(一八七二)年の「差出申一札之事」では、海難事故などのリスクが伴うけれども利潤も高いため、函館への酒の移出許可を願っています。また、明治十二(一八七九)年発行の「東北諸港報告書」によると、新潟港から北海道諸港へ移出された清酒は五万樽で、移出量全体の三分の二を占めています。清酒だけではなく、焼酎も北海道向けの商品として生産されました。焼酎の原料は清酒生産の副産物である酒粕です。展示資料の「廉平日誌」には、沼垂の酒造業者が西蒲原の酒蔵に酒粕の商談に来たことが詳細に記されています。酒粕は、蒲原平野一円から、信濃川・阿賀野川の水運を通じて沼垂に集積されました。また、焼酎の輸送容器として、旧巻町の松郷屋地区で作られていた松郷屋焼の徳利が使われました。沼垂は原料集積、商品移出に好立地であったため、沼垂へ移転する酒造場もありました。北海道との関係は、酒造という産業にも影響を与えたのです。



## 常設展示室から —一部リニューアルしました—

弥生時代の終わりごろ、ちょうどやまいたいこく、卑弥呼が活躍した時代に、深い空堀を持つ防御性の高い集落が新津丘陵につくられました。その集落は、現在、古津八幡山遺跡として国の史跡に指定されています。当時、倭国と呼ばれた日本は戦乱状態にあり、そのことは中国の歴史書に、「倭国大乱」などの記述で登場します。古津八幡山遺跡は、この地にも戦乱が及んでいたことを物語っています。遺跡からは鉄剣や鏃、石つぶてなどの武器も見つかっています。



古津八幡山遺跡のような戦いに備えた集落は、見晴らしの良い山や丘の上につくられることから、こうした集落を高地性集落とも呼んでいます。この集落が廃絶してしばらくしてから、この地に新潟県最大の古墳・古津八幡山古墳が築かれました。

ところで、新潟市は平成十七年に大合併し、平成十九年4月からは政令指定都市になりました。合併によって新

潟市域も広がり、遺跡や文化財の数も増えました。また、それに伴って新潟市の歴史も多様な捉え方ができるようになりました。先述した古津八幡山遺跡も合併によって新しい新潟市の遺跡となり、邪馬台国に関連するような歴史ストーリーが新潟市に加わったのです。

みなとびあの常設展示は、合併前の旧市域を対象にしていました。今回のリニューアルでは、まず、この古津八幡山遺跡の解説をあらたに加えました。また、それに続く古墳時代も、角田山麓や新津丘陵の古墳を含めた解説に改めました。その他、新津丘陵で営まれた古代製鉄を伝える製鉄炉の炉壁や、製鉄の操業の際に流れ出てくる鉄滓(不純物)を追加展示し、さらに江戸時代の新潟町の商業を伝える古文書の展示を加えました。

まだ一部のリニューアルに過ぎませんが、確実に新潟市の歴史情報は増えています。今年秋にも展示替えを行う予定です。お楽しみに。

(小林 隆幸 学芸員)

## おすすめの1冊

### 『街の記憶 劇場のあかり』

——新潟県 映画館と観客の歴史——  
田村聡昭他編 新潟 新潟市民映画鑑賞会発行 二〇〇七年十一月

作品としての映画はあざやかに思い出すことができるのに、その映画を見た「映画館」を、暖味にしか記憶していないということはよくあるのではないのでしょうか。これは、映画館が社会の文化的な基盤を支えるインフラ的な役割を担っている、道路や水道などと同じく、人々の記憶の前面に現れてくることが少ないためだといえます。

本書はサブタイトルに示されているように、映画館とその観客に焦点をあてた書物です。「街で映画を観た」体験を軸として、映画作品の背景に隠れがちな映画館を主役としています。新潟県内に存在する／存在した映画館を可能な限り網羅し、コラムとして映画愛好家たちの映画館体験を挿入する構成をとっているため、資料集としても、読み物としても楽しめます。

本書を読むことで、かつて新潟県内には現在では考えられない数の映画館が存在していたことが分かります。そして、総合芸術である映画が人々の娯楽の中心にあった時代の姿を、掲載された資料や寄稿者の熱い文章から知ることができ

ます。当館との関わりでいえば、本書の製作に際して編集スタッフの方から映画館に関する資料がないかという照会があり、分かる範囲で資料を集めてお答えしたことがあります。調べてみて、思った以上に映画館に関する資料というは少ないという印象を受けました。展示になりづらいテーマを博物館で取り上げることは難しいのですが、本書にまとめられた仕事を参考に、新潟市の文化的な基盤に関する資料を集めていければと思います。



(岩野 邦康 学芸員)



### 展覧会の見どころ

この展覧会では、かつて使われた酒造道具をはじめ、酒精計や酒造備忘などを展示し、明治後期から昭和初期にかけて、科学的手法を取り入れた酒造りに変わっていく過程を紹介しています。また、昭和二十年代から五十年代までの現新潟市域の酒造場で作られた酒のラベルも展示しています。さらに、関川村の財団法人重要文化財渡邊家保存会所蔵(約)二五〇年前に製造された「宝暦の酒」もお借りして展示することができました。これは、渡邊家が酒造りを行っていた江戸時代から伝わるもので、現存する日本酒では最古のものと考えられています。渡邊家以外での公開は今展覧会が初めてです。この機会に、先人たちがはぐくんだ新潟の酒造りの文化にぜひ触れていただきたいと思っています。

(あいの かおり 学芸員)